

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS

No. 118

August 2009

この1年を振り返って



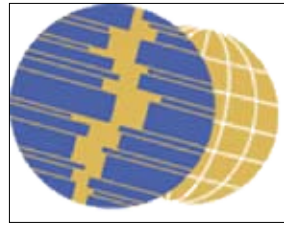
昨年8月からセンター長を務めて、まもなく1年になります。この1年を振り返れば、「新しいスラブ研」をどう作るかの間断ない闘いの日々でした。就任当初から広報面を充実させるべく、スラブ研のHPに「窓」をつくり、時宜にかなったエッセイや最新のニュースが週替わりで動いていくような運営を始めました。SRCレポートやメルマガの創刊など電子媒体をより有効に使った発信も少しずつ軌道にのってきました。

岩下明裕（センターのロゴの入ったボードをバックに） かしながら、私がセンターの業務を引き受けた時期は、いろいろな意味で大きな節目にあたっていたようです。21世紀COEは成功裏に終わりましたが、その次のプロジェクトはまだ模索の状態にありました。長年にわたってスラブ研のステータスを守ってきた全国共同利用施設も認定制度が刷新され、新たに制度化された共同利用・共同研究の拠点としてスラブ研を申請する作業に奔走しなければなりません。その長い闘いのプロセスの中で、昨年秋、まず田畑伸一郎教授が代表を務める新学術領域研究「ユーラシアの地域大国比較」が採択されたことが、大きな勇気を与えてくれました。その後、研究員の多くが基盤（A）や基盤（B）などの科研プロジェクトを首尾良くたちあげ、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が採択され、さらには念願の共同利用・共同研究拠点に認定されるに至り、1年前には全く予想しえなかったポジショニングを、今、スラブ研は得ることができました。

この一連の「成功」はスラブ・ユーラシアにかかわる研究コミュニティのみなさま方のご支援助とご指導の賜に他なりません。改めてみなさまに心よりお礼申し上げます。大きなプロジェクトに併せて、スラブ研は「地域大国研究」や「境界研究」など本来の守備範囲を一步踏み出した「拡大スラブ研」としての機能も始動させていくこととなりますが、あくまでこれまでスラブ研が足場としてきた原点や培ってきた役割を決して見失うことがないように、センターの全員が自覚と覚悟をもって今後より一層の事業展開に全力を尽くしていく所存です。どうぞ今後とも引き続き、スラブ研の活動にご理解とご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

グローバルCOE

文部科学省の「グローバル COE プログラム」の審査結果が 2009 年 6 月 15 日に公表され、全国の国公立大学から申請のあった 145 件から、全国で 9 件が採択され、そのうち北海道大学からはセンターが中心となる下記の 1 件が採用されました。



拠点プログラム名称：境界研究の拠点形成
拠点リーダー名：岩下明裕（スラブ研究センター長・教授）
分野：学際、複合、新領域

なお、すでに仮のホームページが開設されていますので、詳細はそちらをご覧ください。
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/GCOE/index.html> [岩下]

新学術領域研究

◆ 2009 年度夏期国際シンポジウム ◆ 「地域大国と持続的発展の可能性」開催される



セッションのようす

7 月 9～10 日に新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第 1 回国際シンポジウム（2009 年度スラブ研究センター夏期国際シンポジウム）が予定通り開催されました。今回のシンポジウムは、この領域研究のなかで計画研究「持続的経済発展の可能性」をおこなっている経済班（第 3 班）を中心に組織され、この計画研究の研究代表者の上垣彰教授（西南学院大学）が組織委員長を務めました。全体のテーマは、「地域大国と持続的発展の可能性」とされ、マクロ経済、

エネルギー、環境、ミクロ経済（貧困と格差）、長期経済発展の 5 つのセッションが設けられました。この新学術領域研究は、昨年 11 月に採択され 12 月に開始されてから、まだ 7 ヶ月ほどしか経過していませんが、当初意図していたようなユーラシアの地域大国（ロシア、中国、インドなど）の 2 つあるいは 3 つを取り上げて比較するような研究がいくつか発表されたことは大きな収穫でした。そのようななかで、各国のデータを比較可能な形でどのように整理していくのか、分析の結果明らかになった各国の違いをどのように解釈していくのかなど、今後の課題が明瞭になったように思われました。

マクロ経済のセッションでは、（昨年の世界金融危機の前まで）ロシア、中国、インドの経済が高成長を続けたなかで、対外経済関係の果たした大きな役割に焦点が当てられました。貿易の成長への寄与、経常収支の大きな黒字、外貨準備の大幅な増加といった共通性がある

なかで、どのような違いがあるのかについて詳細な分析結果が披露されました。

エネルギーのセッションでは、これら3国がエネルギーの生産あるいは輸入の確保においてどのような問題を抱え、どのように解決しようとしているかについて議論されました。経済成長とエネルギーとの関係という観点からは、石油・ガス大国であるロシアよりも、中国やインドの方が、明るい展望を有しているという印象を受けました。

環境のセッションでは、京都議定書後の気候変動対策に関する各国の対応が焦点となり、日本、中国、発展途上国の対応について、それぞれの地域の専門家による報告がなされました。とくに、中国とインドなどにおいて成長と環境保護をどう両立させるかという問題の難しさが描き出されたように思いました。

ミクロ経済のセッションでは、ロシア、中国、インドの高成長が貧困と格差という問題にどのように影響しているかが分析されました。成長は貧困層の削減には寄与しているものの、格差はむしろ増大しているという現実が、高度な計量経済学的手法によって示されました。

長期経済発展のセッションでは、ヨーロッパと他の地域の間でほとんど生産性の格差がなかったと見なされる近代以前の時代から、現在までという長い歴史のなかで、どのようにして大きな差が生じるようになり、どのようにして東アジアの一部の国によるキャッチアップが生じたのかについて、きめ細かい分析や大胆な仮説が示されました。

この新学術領域研究は、ロシア、中国、インドなどの地域大国が世界のなかで今後より重要な役割を果たすようになるという見通しに基づいて企画されたわけですが、今回のシンポジウムのテーマとされた経済の文脈で考えるならば、昨年来の世界金融危機という状況において、世界経済のなかでの地域大国の役割は、当初想定していた以上に大きなものとなっています。それは、G8サミット（主要国首脳会議）が地盤沈下し、中国やインドなどを加えたG20や主要経済国フォーラム（MEF）が大きく注目されるようになったり、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）の首脳会議が初めてロシアのエカテリンブルグで開かれたりしたことに現れています。そのようななかで、これら地域大国を比較し、世界経済における位置づけを分析し、これら地域大国の経済が何らかの新しいモデルを提示しているのかを学術的に解明するという上記の計画研究「持続的経済発展の可能性」の意義は、ますます大きくなっていることを今回の国際シンポジウムを通じて強く感じました。

以上のような経済関連のセッションに加えて、インド、パキスタン、アフガニスタンの国境地域の問題を扱ったセッションも設けられ、これら3カ国から招かれた3人の研究者と日本人討論者、フロアーの間で熱のこもった議論が展開されました。

今回のシンポジウムには、海外から10人の研究者が招聘されました。その内訳は、南アジア（インド、パキスタン、アフガニスタン）が5名、東アジア（北京、香港）が2名、ロシア、フィンランド、英国が各1名でした。センターでおこなわれた国際シンポジウムにおいて、スラブ・ユーラシア地域からの招聘者がたった1人であったというのは、おそらく初めてのことでないかと思われます。今回の新学術領域研究の特徴を象徴的に示すことですが、これからしばらくはこの傾向が続くかと思われます。

このシンポジウムでは、計17本のペーパーが発表されました。これらは、新学術領域研究のディスカッション・ペーパー『比較地域大国論集』などのセンターの出版物、その他の学術誌に掲載される予定です。

今回の国際シンポジウムは、改修後のセンターの建物で初めておこなわれた大きな催しでした。改装された大会議室内では、演壇の背後にセンターのロゴの入ったボードが立てられ、また、常時、セッションの進行が場外のテレビにも映し出されるなど、新しい試みもありました。大会議室横のレセプション・スペースも、コーヒー・ブレイクの歓談などに、有効に使われたように思われました。なお、シンポジウムには、計111名が参加しました。[田畑]

◆ 新学術領域研究第2回全体集会開催される ◆

夏期国際シンポジウムの翌日、2009年7月11日（土）に、センター大会議室で新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第2回全体集会が開かれました。プログラムは以下の通りです。

● 領域研究活動報告 13:00～13:40

領域代表および各班研究代表者

● 第1セッション「ジェンダー論による地域比較の可能性」 13:50～16:00

栗屋利江（東京外国語大学）「近代インドにおける国民国家の表象とジェンダー」

小浜正子（日本大学）「中国近現代のナショナリズムとジェンダーの表象」

前田しほ（北海道大学）「現代ロシア女性文学におけるジェンダー理解とその可能性」

コメント：篠原琢（東京外国語大学）

● 第2セッション「帝国・地域大国の歴史認識」 16:10～18:00

守川知子（北海道大学）「近代イランの自画像」

小笠原弘幸（青山学院大学）「近代オスマン帝国における世界史叙述と「トルコ」

コメント：村田雄二郎（東京大学）、宇山智彦（北海道大学）

第1セッションでは、この領域研究において班を超えた共同研究のテーマの一つとしている、ジェンダーの問題を取り上げました。ジェンダーは従来スラブ研究センターが十分に研究してこなかったテーマの一つで、これを大きな研究会のテーマとしたのは今回が初めてだと思います。

ジェンダー理解には地域差があると同時に、国家の表象やナショナリズムにも関係する問題であり、比較研究のテーマとして適しています。このセッションでは、インド、中国、ロシアの例に則した報告に対し、東欧研究者からのコメントを聞くという形をとりました。いずれの報告も、ヴィジュアル資料や小説からの引用をふんだんに使いながら、国家が女性として表象される場合と男性的な要素によって表象される場合、西洋からのまなざしが東洋の女性解放に働きかける場合と、「神秘的」な東洋女性に対する欲望として作用する場合など、さまざまなケースを論じました。また、職業面での女性の地位向上が進んだソ連や中国において、西洋フェミニズム的な意味での女性の権利よりは、職業と家庭の二重負担や男女の人間関係の構築が問題となっていることが指摘されました。全体として、ジェンダーがそれぞれ自体重要であると同時に、帝国権力やオリエンタリズムなどさまざまな問題を掘り下げる際に注目すべきテーマであることが実感されました。

第2セッションは、歴史認識が帝国の近代化の過程でどのように変容し、現在の地域大国の意識につながっているかという問題意識から企画したものです。イランとオスマン帝国に関する報告に対し、中国研究・中央アジア研究の視点からのコメントを加えることにより、比較の議論を組み立てることを試みました。両報告とも、19世紀から20世紀初頭の西アジアにおいて、西洋の歴史学・東洋学の影響のもとで、イスラームの伝統とは異なる新たな歴史叙述が生まれ、古代ペルシアの栄光や、オスマン帝国の枠に限定されないトルコ人としての民族性が再発見されたことを強調するものでした。歴史記述の枠組みが王朝史から民族史・国民史に移行し、それと連動して自己認識・他者認識が変化するという現象は、他の多くの地域にも共通するものであると同時に、帝国・国家の枠組みと民族の枠組みのずれ方などによってさまざまなヴァリエーションがあります。現在の地域大国が何をもって誇りの源泉としているかを考えるうえでも、歴史記述・歴史認識を研究することは不可欠であることが確認されました。[宇山]

◆ 『比較地域大国論集』 第1号の刊行 ◆

3月4日に開催された第1回全体集会の記録が、新学術領域研究ディスカッションペーパー『比較地域大国論集』の第1号として発行されました。本領域研究のホームページ (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/index.html>) からダウンロードすることができます。[田畑]



研究の最前線

◆ 2009年度科学研究費プロジェクト ◆

2009年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです。[編集部]

基盤研究 (A)

岩下 明裕 ユーラシア秩序の新形成：中国・ロシアとその隣接地域の相互作用 (2006-09年度)

望月 哲男 ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究 (2009-11年度)

ウルフ ディヴィッド 北東アジアの冷戦：新しい資料と展望 (2009-12年度)

基盤研究 (B)

松里 公孝 ロシアにおける宗教復興：公共機能、ライフヒストリー、空間動態 (2009-11年度)

宇山 智彦 近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史 (2009-12年度)

林 忠行 ラテンアメリカと中東欧の政治変動比較：民主主義の定着過程の比較動態分析 (2009-12年度)

松里 公孝 宗教、国家、マイノリティが織りなす環黒海跨境政治 (海外) (2009-11年度)

基盤研究 (C)

長縄 宣博 ロシア帝国南部辺境のムスリム統治機構と対外政策 (1856-1914) (2007-09年度)

若手研究 (B)

越野 剛 ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける歴史小説の比較研究 (2009-11年度)

後藤 正憲 ロシア・チュヴァシにおけるト占の歴史人類学的研究 (2009-11年度)

青島 陽子 ロシア帝国諸民族の統合政策：辺境・教育管区への教育政策に関する比較研究 (2009-12年度)

若手スタートアップ

野町 素己 機能的形態統語論によるスラブ諸語類型研究：所有性の意味範疇をめぐって (2008-09年度)

学振特別研究員奨励費

大串 敦 ソ連末期における統治機構崩壊の総合的研究 (2007-09年度)

菊田 悠 中央アジア定住地帯の秩序の再編成プロセスにおけるイスラーム聖者と聖性の役割 (2007-09年度)

佐藤 圭史 ソ連末期における民族問題マトリョーシュカ構造の実証研究 (2008-10年度)

安達 大輔 近代的読書メディアとしてのロシア・ロマン主義文学研究：「社交界小説」を中心に (2009-11年度)

◆ 公開講座 ◆

世紀を超えて：東欧革命後の20年を振り返る

が開かれる

第24回スラブ研究センター公開講座が5月11日から6月1日まで、全7回おこなわれました。東欧革命20周年を機会に、さまざまな切り口から今日までの変化を概観しつつ、その意義を改めて検証するものでした。

東欧をテーマとした公開講座はこれまでも数回おこなわれ、それぞれ好評を博してきたようですが、今回も募集定員数80名に対し86人の方が受講されるなど、中東欧への関心はますます高くなっているようです。[野町]

日 程	講 義 題 目	講 師
第1回 5月11日(月)	変わる言語地図：「多言語化」するスラブ世界	北海道大学スラブ研究センター 准教授 野町素己
第2回 5月15日(金)	変わる宗教世界：キリスト教2000年と共産主義	国立民族学博物館 准教授 新免光比呂
第3回 5月18日(月)	変わる経済地図：比較経済後進性論の視点から	西南学院大学 教授 上垣彰
第4回 5月22日(金)	変わる環境問題：ドナウ川ダム建設問題とその行方	北海道大学スラブ研究センター 教授 家田修
第5回 5月25日(月)	変わる文学：21世紀の世界文学に向けて	東京大学 教授 沼野充義
第6回 5月29日(金)	変わる歴史認識：歴史の修正をめぐる諸問題－第2次世界大戦史を中心に－	東京大学 教授 柴宜弘
第7回 6月1日(月)	変わる政治：EU加盟は東中欧政治にどのような影響を与えたのか？	北海道大学スラブ研究センター 教授 林忠行

◆ 共同研究・共同利用の公募 ◆

スラブ研究センターは全国共同利用施設として、また今回新たに認定された共同利用・共同研究の拠点として、「スラブ・ユーラシア地域研究」に関する諸分野の研究コミュニティに対するリソースの開放を目指しています。プロジェクト型と共同利用型の公募がその主たる事業です。2008-09年度の応募数はプロジェクト型11件、共同利用型11件、採択数はプロジェクト型4件（辞退1件）、共同利用型10件でした。次年度の公募は年末にかけておこなわれますので、みなさまふるってご応募ください。なお、事業の詳細については、以下を参照願います。[岩下]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/bosyu/20090520.html#20090717>

2008-09年度採択者一覧（プロジェクト型）

氏 名	所 属	研究課題名
大島 一	独立行政法人国立国語研究所研究開発部門	オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー人マイノリティの言語的・社会的調査
小澤 実	名古屋大学大学院文学研究科	ロシア隣接地域との交渉から見た中世北西ユーラシア歴史空間の再構築
篠原 琢	東京外国語大学大学院総合国際学研究院	境界地域における記憶と忘却の複合的・対抗的構造の分析：中央ヨーロッパの第二次世界大戦
仙石 学	西南学院大学法学部	ポスト社会主義国における選挙データの体系的整理

(共同利用型)

氏名	所属	研究課題名
佐々木路子	ユーラシア研究会・日本国際地理学会・カムチャツカ研究会会員	レーメゾフ『シベリア地図帳』の歴史地理学的研究
松井 康浩	九州大学大学院比較社会文化研究院	ソヴィエト市民による「自分史」の試み：後期ソ連体制下に書かれた「自伝的記録」の研究に向けて
ブフ アレクサンダー	筑波大学大学院人文社会科学研究所	ロシアのナショナル・アイデンティティと露日関係
井竿 富雄	山口県立大学国際文化学部国際文化学科	シベリア出兵収拾期の日本の諸政策：保障占領と「救恤」
井上 暁子	日本学術振興会特別研究員	ドイツ・ポーランド国境地帯の文学：パヴェウ・ヒュレ『ヴァイゼル・ダヴィデク』
グレチュコヴァレリー	神戸大学国際文化学部	文化記号論の基本的カテゴリーとしての〈境界・中心・周縁〉
中村 友一	中部大学国際関係学部	麻薬取引と紛争の現状：アフガニスタンと中央アジアを対象に
福間 加容	千葉大学文学部	ロシア象徴主義美術からアヴァンギャルドへ：普遍的芸術創造のための美学
森下 嘉之	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	帝政期から戦間期におけるチェコスロヴァキア都市社会の変容過程
横田 慎介	株ゆめみ	太平洋戦争中の日ソ関係：重光外相とマリク駐日大使の視点から

◆ 2010年度外国人特任教授決定 ◆

2010年度における外国人特任教授の審査がおこなわれ、41人の応募者の中から、以下の6名の正候補者が、過日の協議員会で承認されました。なお、宿舎の確保の関係から、同時に滞在する特任教授は3名を限度としています。[荒井]

アルト、パミ (Aalto, Pami)

所属・現職：タンペレ大学ジャン・モネ EU 研究センター教授

研究テーマ：国内規模、国際規模、地球規模の次元から考えるロシアのエネルギー政策

予定滞在期間：2010年6月1日～9月30日(4ヵ月)

フェン、ユジュン (馮玉軍) (Feng, Yujun)

所属・現職：中国現代国際関係研究院 (CICIR) 教授

研究テーマ：BRICs 諸国のケーススタディ：新興諸国間における協力醸成メカニズムの実現可能性、方法、意味

予定滞在期間：2010年11月1日～2011年3月31日(5ヵ月)

クジオ、タラス (Kuzio, Taras)

所属・現職：トロント大学ウクライナ研究講座上級研究員

研究テーマ：ウクライナ現代史

予定滞在期間：2010年10月1日～2011年3月31日(6ヵ月)

ポポヴィチ、リュドミラ ヴァレンチン (Popovic, Ljudmila Valentin)

所属・現職：ベオグラード大学言語学部スラブ部門教授

研究テーマ：日本におけるウクライナ研究：現代日本文化のなかのウクライナ・イメージ
 予定滞在期間：2010年6月1日～9月30日（4ヵ月）

ヴィソコフ、ミハイル スタニスラヴォヴィチ (Vysokov, Mikhail Stanislavovich)

所属・現職：サハリン国立大学ロシア史学部教授

研究テーマ：ペレストロイカおよびポスト・ソヴィエト期のロシア極東史をめぐるヒストリオグラフィー

予定滞在期間：2010年10月1日～2011年3月31日（6ヵ月）

モリソン、アレクサンダー スティーヴン (Morrison, Alexander Stephen)

所属・現職：リヴァプール大学歴史学部講師

研究テーマ：ロシアの公式見解の中の中央アジア征服

予定滞在期間：2010年6月14日～10月30日（4ヵ月半）

◆ 2009年度鈴川・中村基金奨励研究員決定 ◆

選考の結果、次の5名の方々が、本年度の鈴川・中村基金奨励研究員として選ばれました。

[野町]

採用決定者・所属	専攻分野・テーマ	希望滞在期間	ホスト教員
新井 正紀 千葉大学大学院社会文化科学研究科	ソ連邦の文化政策史、特に少数民族に対する文化政策や教育事業について	2009年 7月6～17日	松里
岩崎 理恵 東京外国語大学大学院地域文化研究科	銀の時代を代表する詩人アレクサンドル・ブロークの創作について（詩を中心に）	2009年 7月16～25日	望月
亀田 真澄 東京大学大学院人文社会系研究科	旧ユーゴスラビア地域のアイデンティティ・ポリティクスとマイノリティの問題	2009年 11月1～22日	野町
坂中 紀夫 神戸市外国語大学外国語学研究科	ロシア史。18・19世紀ロシアのナショナリズムの発生と流行について	2009年 9月18日～10月2日	望月
仲津 由希子 東京大学大学院総合文化研究科	19～20世紀ポーランド政治思想史	2009年 10月27日～11月14日	松里

◆ スラブ研究センター・ブルッキングス研究所の共催シンポジウム開催 ◆

2009年5月8日に北海道大学スラブ研究センターとブルッキングス研究所北東アジア政策研究センターの共催シンポ「北東アジアを越える日米同盟」がワシントンDCで開催されました。ワシントンにおける日本の存在感は、これまで中国や朝鮮半島を中心とした北東アジア政策コミュニティに限られてきましたが、この企画は米国の「知らない」日本における地域研究の蓄積、これまでの日本の対外貢献を彼らに伝え、北東アジアを越える日米関係のあり方をソフトの面から探ろうという取り組みでした。

シンポジウムは国際交流基金の助成をもとに、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比

較研究」の支援によって実施されました。また現地では大使館によるレセプションや東西センター主催のセミナー（「北東アジアにおける中国とロシア」）なども併せて開催されました。米国側パネリストは、リチャード・ブッシュを筆頭にブルッキングスの錚々たるメンバーが研究対象地域を越えて、「オール・ブルッキングス」で集結しました。日本側のスピーカーは第1部「中国とロシア」で中居良文（学習院大）・兵頭慎治（防衛研究所）、第2部「中東欧と中東」で林忠行（センター）・酒井啓子（東京外大）、第3部「中央アジアと南アジア」で宇山智彦（センター）・吉田修（広島大）でした。日本側の報告者のいずれもセンターの研究活動に深く関与されてきたばかりですが、中居、吉田のお2人は、新学術領域・国際関係班の主力メンバーであることも書き添えておきます。



第3部の演壇のようす

シンポジウムの成果については英語版がブルッキングスのホームページで、日本語版がセンターのホームページに掲載されています。[岩下]

http://www.brookings.edu/~media/Files/events/2009/0508_us_japan/20090508_japan_full.pdf

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/report/20090702-j.pdf>

◆ ベルント・ハイネ名誉教授の特別講演 ◆

2009年6月15日（月）、スラブ研究センターにてドイツの言語学者ベルント・ハイネ名誉教授（ケルン大学）の特別講義がおこなわれました。ハイネ教授は、一般言語学、言語類型論、アフリカ諸語研究、社会言語学など幅広い分野で世界的に活躍されている学者です。近年は、特にタニヤ・クテワ教授（デュッセルドルフ大学）との共同研究に取り組み、言語接触論および類型論研究で成果を上げられてきました。中でもいわゆる「文法化理論」に基づく研究が著名であり、2005年以降、教授はこのテーマでほぼ1年に1冊という驚異的なペースで著作を上梓されています。尚、ハイネ教授のお話では、教授は本をお書きになるのは好きではないが、論文を書き始めると多くの疑問が沸いてきて、それらを解決している結果として本が出来てしまうのだそうです。



ハイネ教授

ハイネ教授は、昨年秋より東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の客員教授として1年間の予定で日本にご滞在中です。世界的に著名な教授は、日本でも非常に多くの研究会や学会に引っ張りだこで、文字通り多忙を極めていらっしゃいます。現在私が取り組ん

でいる研究のひとつに「スラブ諸語における本動詞の助動詞化に関する類型的研究」というテーマがあるのですが、スラブ語に限定せず、当該現象についてより広い視点から論じられる方としてハイネ教授の研究が常に頭にありました。教授が日本に長期間滞在されているというのは、講演会を組織するのにまたとない機会なので、無理を承知でセンターでもご講演を依頼したところ、教授は二つ返事でお引き受けくださいました。後でわかったのですが、6月中は *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis* (2009年9月刊行予定) の最終稿の校正、ブリュッセルで欧州研究機構 (European Research Council) の会議、さらにウガンダでのワールドワークなどがあり、大変お忙しかった筈です。実際、札幌の観光にお誘いしたのですが、教授はホテルでずっとお仕事をされていました。改めてハイネ教授の寛大さに驚嘆し、そしてこの場をお借りして、教授に心よりお礼を申し上げます。



左：野町、中：ダニレンコ教授、
右：ハイネ教授

「ひとつの言語圏としてのヨーロッパ (Europe as a Linguistic Area)」と題された今回の特別講演では、まず E. レヴィの古典的研究や M. ハスペルマスの「ユーロタイプ」といったヨーロッパ諸言語を言語圏と見る先行研究の概説をされてから、その問題点を提起した上で、ご自身が提唱される動的類型論 (Dynamic Typology) について論じられました。動的類型論とは、言語の通時的側面を踏まえた類型論で、特に「標準語以外の言語形態」、「言語変化の連続性」、「文法的な模倣」、そして「文法化」という概念に注目した理論です。この枠組みに基づきハイネ教授は、主に次の5点

をお話になりました。(1) 言語学的に定義できるヨーロッパ地域のようなものは存在するか。もし存在するならば、どのようにそれを定められるか。(2) ヨーロッパ諸語の地域的な中心が定められる何かがあるか。(3) ヨーロッパの諸言語を世界の他の言語から区別できる言語学的な特性はあるか。(4) もしヨーロッパが言語圏をなすのであれば、それを突き動かす原動力は何か。(5) 言語系統とは無関係にヨーロッパの諸言語をさらに小区分することが可能か。これらの問題に対し、教授は「本動詞の機能的変容と助動詞化」、「指示代名詞の不定冠詞化」、「人称代名詞の敬語的用法への変化」を題材とし、文法化の意義を強調した持論を展開されました。

講演会は言語の専門家以外にも実に興味深い内容であり、実際に言語研究者だけではなくポスターで講演会を知った一般の方まで40人程が来聴されました。質疑応答は講演の予定時間を大幅に超えてしまうなど、大変充実したものになりましたが、中でも本年度の外国人研究員アンドレイ・ダニレンコ先生が、ハイネ教授の「東スラブ諸語はヨーロッパ諸語のペリフェリー」という見解に対し、それはあくまでも西ヨーロッパ諸言語を基準とした言語分類による「ペリフェリー」であり、別の分類基準が十分立てられること、そして東スラブ諸語が必ずしも「ペリフェリー」ではないことを論じたのが特に印象的でした。

ハイネ教授はスラブ語研究者ではないのですが、私は「言語類型論の視点からスラブ諸語の特徴が浮かび上がるように、いろいろなスラブ諸語の例をできるだけ多く扱っていただきたい」と予めお願いしておきました。教授は言語接触に端を発する文法化の例として、ロシア語やポーランド語といったメジャーなスラブ語だけではなく、イタリアのモリーゼ・スラブ (クロアチア) 語やドイツのソルブ語といった少数話者の聞きなれないスラブ語の例も多数挙げてくださり、ヨーロッパ諸語の中におけるスラブ諸語の位置づけと同時に、スラブ語世界の多様性を垣間見ることができる大変興味深い講演であったように思います。

尚、今回のハイネ教授のご講演は、3月のロムアルド・フシチャ教授（ワルシャワ大学 / ヤゲロー大学）のご講演（『センターニュース』No. 117）と合わせて、「スラブ諸語における文法化：地域的・類型論的アプローチ」と題した論集に掲載予定です。この論集には、上述のタニヤ・クテワ教授、ミルカ・イヴィッチ教授（セルビア科学芸術アカデミー、セルビア語研究）、オルガ・ミシエスカ＝トミッチ教授（ライデン大学、バルカン諸語研究）など、著名なスラブ語学者の寄稿も予定されています。刊行をぜひご期待ください。[野町]

◆ アンドリイ・ダニレンコ氏特別講義 ◆

去る6月19日（金）に、2009年度の外国人研究員アンドリイ・ダニレンコ氏の講義が東京大学文学部現代文芸論研究室、スラブ語スラブ文学研究室およびスラブ研究センターの共催で、東京大学にておこなわれました。幾分特殊なテーマであったように思いますが、ダニレンコ氏の熱心な講義の後には積極的な質疑応答が続き、盛況のうちに終わりました。

講義題目は「東スラブ語における「持つ」こと：be型とhave型の間で」で、ロシア語を中心としたスラブ諸語類型論の講義でした。所有表現をbe動詞とhave動詞を基準とした言語類型は、E. バンヴェニスト、A. イサチェンコ、B. ハイネといった多くの言語学者たちが取り組んできた課題で、今日でもアクチュアルな研究テーマの一つと言えるでしょう。この分類に従うと、ロシア語をはじめとした東スラブ諸語はいわゆるbe動詞言語であるというのが通説ですが、ダニレンコ氏は言語類型論、歴史言語学、東スラブ諸語方言学の立場からこの問題を再検討し、東スラブ諸語は純粋なbe言語ではなく、be動詞およびhave動詞の二つのシステムが並立していることを示しました。



東京大学での講義の様子

会場となった本郷キャンパスの文学部3号館は、私が20代の殆どを過ごした懐かしい場所ですが、スラブ語学関係の講義で受講者が一杯になった教室を見るのは、まことに嬉しい限りでした。本講義の実現にご尽力くださった東京大学の沼野充義教授および関係者の方々にお礼申し上げます。

また、ダニレンコ先生は7月10日（金）には京都大学大学院文学研究科スラブ語学スラブ文学研究室にて、「ウクライナ語を話題の中心にすえ「be型かhave型か、ウクライナ語は過渡的な言語か？」と題した講演をされました。ご協力くだ



左：佐藤昭裕先生、右：ダニレンコ氏
さいました京都大学の佐藤昭裕教授とご出席くださった方々にお礼申し上げます。

尚、ダニレンコ先生の言語類型論研究は、先生のご著書 *Slavica et Islamica: Ukrainian in*

Context (Otto Sagner 社より 2006 年刊行) で読めますので、ご興味をお持ちの方はご一読をお勧めいたします。[野町]

◆ 第 2 回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスはソウルで ◆

今年 2 月に北海道大学でおこなわれた第 1 回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスは大きな成功を収めました(『センターニュース』No. 117)、第 2 回は 2010 年 3 月 4～5 日にソウルで開催されることになりました。韓国の同僚を中心に準備が進められ、すでにパネルの提案は締め切られました。詳細は松里まで。[松里]

◆ 北海道スラブ研究会の活動 ◆

センターは、スラブ地域(旧ソ連・東欧地域)に関心を持つ一般の人々との連携を深めるため、道内の研究者・市民の方々と共に「北海道スラブ研究会」を主催しています。同会では、内外の専門家を招いて講演会・研究報告会を開催していますが、昨年度は、以下のように合計 8 回の研究会が開かれ、文化・歴史の問題から最新の国際関係の話題まで多彩なテーマが扱われました。

- 4 月 28 日 L. シェフチューク(在札幌ロシア連邦総領事)「これからの露日関係：北海道洞爺湖サミットを前に」(総会)
- 6 月 16 日 野町素己(センター)「多言語社会と単一言語社会の間で：旧ユーゴスラヴィア諸国における今日の言語状況について」
- 11 月 6 日 本村眞澄(石油天然ガス・金属鉱物資源機構)「旧ソ連の石油・ガスをめぐる新情勢：ロシア＝グルジア紛争の影響はあるのか？」
- 12 月 18 日 松里公孝(センター)「環黒海における政治と宗教：非承認国家問題と正教外交」
- 1 月 15 日 胡振華(中央民族大学・教授)「中国と中央アジア諸国との民族間交流」
- 2 月 10 日 R. ティシュケヴィッチ(在日ポーランド共和国大使館)「国際関係における活動的なアクターとしてのポーランド」
- 3 月 13 日 G. キム(カザフ国立大)「中央アジアの朝鮮：民族的アイデンティティと意識の変容」
- 3 月 26 日 伊藤庄一(環日本海経済研究所)「ロシアの対北東アジアエネルギー外交：現況と展望」

4 月 30 日には、センター大会議室において定例の総会が開かれ、新年度の役員と予算が決められると共に、会則の改定に関する提案が採択されました。新会則などの情報については、センターのウェブサイト(<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/slav.html>)で見ることが出来ます。

また、総会の後には、樋渡雅人さん(北大・経済学研究科)を講師として、「『慣習経済と市場・開発』とその後：『機能』から『構造』へ」というテーマで研究会が開かれ、活発な議論がおこなわれました。

北海道スラブ研究会は、今年度も、昨年度に引き続き、多くの研究会を開催する予定ですが、会をより活性化するためにも、新しい会員を増やしていきたいと考えています。入会は、スラブ地域(東欧、ロシア、中央ユーラシアなどの旧ソ連、東欧の諸地域)に関心をお持ちの方ならどなたでも歓迎です。会員には、スラブ研究センターが主催するシンポジウム、セミナーなどの情報を随時お知らせしています。入会の時期に制限はありません。スラブ研究センターの大須賀みか(Tel/011-706-2385, Email/ mika@slav.hokudai.ac.jp)までご連絡いただければ、その時から随時、研究会などの通知を電子メールでお送り致します。[山村]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、以下の専任研究員セミナーが開かれました。

4月28日：松里公孝 “Political Discourse and Trans-border Politics in Georgia and Ossetia after the Five-day War”

センター外コメンテータ：中村研一（北大公共政策大学院）

報告者が3月末にグルジア・南オセチアでおこなったばかりの現地調査の成果で、いつものながらのフットワークの軽さと速筆さを表すペーパーでした。戦争を始めたのは誰か、グルジアは今後何をすべきかなどについてグルジア野党の見方を紹介するとともに、ロシア軍の出動の遅さにオセト人が苛立ったことなど、南オセチアの雰囲気をよく伝えていました。また、紛争当事国・地域のエキスパート集団間の交流に着目する点で、報告者の持論である跨境論にもつながるものでした。出席者からは、インタビュー以外の手段での情報収集が不十分であること、相手の主張・見解に引きずられ、メタレベルの言説分析になっていないことに疑問・批判が寄せられました。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース117号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

- 4月30日 樋渡雅人（北大）『「慣習経済と市場・開発」とその後：『機能』から『構造』へ』（北海道スラブ研究会総会）
- 5月25日 A. ポノマリョーヴァ（インペリアル・カレッジ：インペリアル・ビジネススクール、英国）“Russian Symbolism and Indian Thought: The Case of Andrei Belyi”（センター特別セミナー）
- 6月2日 兎内勇津流（センター）「スラブ研所蔵資料のWeb公開システム開発」（昼食懇談会）
- 6月4日 A. モリソン（リヴァプール大、英国）“Kazakhs Behaving Badly? N. S. Lykoshin and the Aftermath of the Andijan Uprising”（センターセミナー／新学術領域研究「比較地域大国論」第4班研究会）
- 6月15日 B. ハイネ（ケルン大、ドイツ）“Europe as a Linguistic Area”（センター特別セミナー）
- 6月19日 B. ラーニン（ロシア教育アカデミー）「ロシアにおけるユートピア的想像力（ロシア語）」（センターセミナー）
- 6月24日 井上暁子（日本学術振興会特別研究員）「体制転換とポーランド移民文学」（センターセミナー）
- 7月12日 越野剛（センター）「ロシア文学における中国のイメージ」；住家正芳（東京大）「加藤玄智と梁啓超：日中比較で見る文化統合イデオロギーとしての宗教」（「地域大国の文化的求心力と遠心力」研究会）
- 7月16日 新井正紀（千葉大）「ソ連邦における義務教育の導入と少数民族：コミ・ペルミヤーク管区を事例として」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
- 7月18日 宇佐見耕一（アジア経済研究所）「アルゼンチンにおける福祉国家の変容と連続」；仙石学（西南学院大）「中東欧諸国における福祉制度の再編」（「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第3回研究会）
- 7月23日 A. ダニレンコ（センター）“The Ukrainian Bible, the Polish Uprising, and Imperial Censorship in 1863”（センターセミナー）
- 7月24日 岩崎理恵（東京外国語大）「ブロークの初期詩篇“Ante Lucem”について」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）；山本強（北大）「情報空間があぶりだす社会構造の変化」（GCOE-SRC ボーダースタディーズ・セミナー）
- 7月31日 G. サニキゼ（東洋学研究所、グルジア）“Understanding Current Political Crisis in Georgia”（GCOE-SRC 特別セミナー）

上海協力機構と新疆民族問題：上海での会議に参加して



会議のようす

中国のロシア・中央アジア研究者の「飯の種」でもある上海協力機構（SCO）に重点が移っている。

誰が参加するのか事前には知らずに行ったが、会場に着いてみると、元スラ研外国人研究員のシン・グァンチェン氏やセバスチアン・ペイルーズ、マルレーヌ・ラリュエル夫妻、『日本の中央アジア外交』（北大出版会）の執筆者の一人であるニクラス・スワンストローム氏、元国連大学研究員のラフィス・アバゾフ氏、岩下氏の友人であるアレクサンドル・ルキン氏と、縁のある人を次々と見つけることができた。中国側からは、SCOの副事務局長や外交部（外務省）欧亜局副局長などの高官が長時間にわたって出席していた。他方で、旅費の工面がつかなかったらしく中央アジアからの参加者が少ないのは残念だった。金融危機の影響はここにも現れている。

今回の会議は、「中央アジア・南アジアの安全保障状況とSCO」、「金融危機とSCOの対応」、「SCOと米国・EU・日本の関係」を主なテーマとしていた。建前論ばかりの退屈な議論が続くのではないかという一抹の不安を私は抱いていたが、幸いにも予想は裏切られ、かなり率直な意見交換が行われた。特に突っ込んだ議論が行われたのは、金融危機などの経済問題だった。SCOも加盟国も金融危機を当初過小評価し、対処の仕組みを作れなかったこと、SCOは多国間協力の機構であるはずなのに経済協力が二国間でしか進んでいないこと、などが口々に指摘された。特に中国人参加者たちから、ロシアがSCOでの経済協力を消極的であるだけでなく、国内産業への補助金や関税、反ダンピング調査で中国との貿易に障壁を設けていること、中国人をバザールから閉め出していることなどに不満の声が上がった。

日本や欧米では、中国とロシアがSCOを通じて反米でがっちり手を組んでいるかのように語られることが多い。SCO設立の経緯や趣旨から言ってもこの見方が不適當であることは岩下氏が繰り返し説いている通りだが、加盟国間の利害の違いという問題も相当大きいだろう。そもそも、SCOが「非・西側」組織としてある程度結束できるのは、国家主権と内政不干渉を西側に対して強調する方針を共有するからだが、主権を金科玉条として自国の利益を護らず、資金の拠出を渋るという姿勢では、SCO内部での協力も進まないのである。加盟国は

宇山智彦（センター）

暑いのが嫌いで、東京より南にはなるべく行かないことにしていた私だが、今年の2月にコルカタ（カルカッタ）とバンコクに行って南国の活気に魅せられたのに続き、7月17日から20日まで、札幌との気温差20度という炎天下の上海に乗り込んできた。目的は、上海社会科学院などが主催した、第9回中央アジア・上海協力機構国際学術会議への参加である。隔年に開かれており、16年前に始まった当初は中央アジアに焦点を当てる会議だったそうだが、今はむしろ、

SCOにそれなりに熱意を持っており、首脳や大臣らが頻繁に会議を開いているものの、宣言が実質的な協力になかなか深化していかないのは、こうした構造的な問題があるためだと思われる。

なお、日本と中国・SCOの関係を明示的に論じたのは私の報告だけだったが、セッションのタイトルの中に日本が入っていることから分かるように、会議のオーガナイザーたちは日本との関係にかなり関心を持っているようだった。

中央アジアでの輸送網整備や非核地帯条約締結における日本の役割と、中国・SCOとの協力の可能性についての私の話は好意的に受け止められたし、討論者は、2年前の会議で岩下氏が述べた「SCO+3」（SCOと日米欧の対話）構想を高く評価していた。SCOがユーラシアの国際関係の中で重要視されることで、「中央アジア+日本」対話のような日本のイニシアティブが目立ちにくくなっていることも否定できないが、協力の可能性を唱え続けることは、日本の存在感を保つうえで有益なはずである。

さて、会議の隠れたメインテーマの一つは、2週間前に新疆で起きた騒乱であった。基調講演で外交部副局長が、暴動への対処は効果的に行われたと述べたのを皮切りに、SCOの取り締まり対象である「三悪」（テロリズム、分離主義、宗教的過激主義）と新疆騒乱を同一視する発言が相次いだ。中国人の討論者がスウェーデン人報告者に対して、スウェーデンの上院議員がラビヤ・カーディル（中国政府が事件の首謀者扱いしている世界ウイグル会議議長）をノーベル平和賞に推薦したのはけしからんと食ってかかる場面もあったが、実はこの報告者は分離主義取り締まり賛成の立場だったため、同感だと言って丸く収まってしまった。

私はこの流れをどう変えようかと考えを練っていた。報告の最初から民族問題の話するのは会議のテーマに合わないし、最後に触れようとして制止されるのも避けたいので、報告の最初の5分と最後の5分で、日本と中国が東アジアの繁栄を中央アジアに広げるために協力すべきだという話をし、途中の5分で、中央アジアでの国際協力の障害となる不安定要因として、新疆の民族問題に触れることにした。ソ連の民族政策は失敗だったと思われがちだが、多数派民族に抑制的態度を身につけさせることにはある程度成功し、ソ連崩壊の際もロシア人と非ロシア人の民衆同士の衝突はほとんど起きず、現在も中央アジアでのロシアの評判は良いこと、他方漢族とウイグル人の中には残念ながら相互不信があり、広東での漢族によるウイグル人襲撃が新疆騒乱の引き金を引いてしまったこと、新疆でのウイグル人・カザフ人の苦境がカザフスタンでも動揺を生んでいることを私は指摘し、テロよりも民族間不和が中央アジアにとっての脅威であることを訴えた。

制止または非難されるのではないかという私の心配は杞憂だった。討論者は、騒乱を過激主義と結びつける姿勢は崩さないものの、ソ連の民族政策への一定の評価や民族間対話の必要性については私に賛成してくれた。翌日のセッションの司会者が、暴動に加わったのは少数の人間でありほとんどの漢族とウイグル人は調和的に暮らしていると述べて、間接的に私に反論したが、全体的には、新疆の問題を多面的に考えるべきだという論調が会議の後半では強くなった。「アフガニスタン、パキスタン、新疆がSCOの安全保障上の課題だ」という



万博の盛会を共に迎え、和諧の歌を合奏しよう

並べ方は問題の本質を取り違えていると思ったが、新疆の問題の深刻さを認識し、タブーにしない姿勢は中国人参加者に共有されているようだった。

中国での情報の自由化はかなり進んでいる。インターネットでは、民族運動団体のサイトへのアクセスはブロックされているものの、新疆に関する海外での報道にはほぼ自由に接することができる。話題は違うが、ホテルのテレビでは、中国の教育政策は「計画経済的」と批判する台湾の番組も流されていた。しかし、情報の流れの自由が民主化や民族問題の解決に結びつかないというのが、中国の（そして、中央アジアやロシアの）現状である。今回の事件でも、ネットや携帯でデマが流されたことが、漢族とウイグル人への敵意を煽ったし、中国政府が漢族の被害を強調し騒乱とテロを同一視する報道を強力に流して、情報戦でウイグル民族運動側に対し優位に立ったことが指摘されている。漢族のいわゆるネット市民たちの多くが中華ナショナリズムの強力な担い手であることもよく知られている。

上海の街は、日本の都市よりも目立って高い若者比率、金融危機をよそに続く建設ラッシュ、鉄道の営業運転としては世界最速の時速430キロを誇る空港連絡リニアモーターカーなど、荒削りではあるが元気に溢れた場所で、楽しく滞在できたが、中国の急激な成長とは裏腹に解決の見通しが立たない民族問題のことを考えると、心は晴れなかった。つつい中央アジアのラグマン（うどん）が食べたくなって入ったウイグル料理屋で、3000キロ以上離れた新疆に思いを馳せた。そして、母語による教育の機会が奪われ、古い街並が壊され、地元による職が少ないという状態で将来を見失っているウイグル人の思いを漢族が理解し、真の「和諧」社会が実現することを願わずにはいられなかった。

学 界 短 信

◆ 比較経済体制学会第49回全国大会開かれる ◆

比較経済体制学会の今年度の全国大会が6月6日～6月7日に国学院大学で開催された。今年の大会では、「独裁体制の経済分析：過去と現在」と「移行経済体制における政府－企業間関係」の2つが共通論題とされた。前者では、スターリン体制、毛沢東体制、ミャンマー軍政、北朝鮮の現体制についての報告がなされた。さらに、緊急パネル「世界金融危機と移行諸国」が準共通論題として設けられ、金野雄五（みずほ総研）、松沢祐介（西武文理大）、渡辺真理子（アジア経済研）、大田英明（愛媛大）の各氏がロシア、中東欧、中国などについて報告をおこなった。総会では役員選挙がおこなわれ、新しい代表幹事に栖原学氏（日本大）が選出された。また、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）に再加盟することが承された。今年度の秋期大会は10月24日に立命館大学（びわこ・くさつキャンパス）で開催され、来年度の全国大会は2010年6月5～6日に大阪市立大学で開催される予定。[田畑]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2009年10月8-11日 中央ユーラシア学会（CESS）年次大会 於トロント
- 10月11-12日 ロシア史研究会大会 於法政大学
- 10月17-18日 ロシア・東欧学会 於秋田大学
- 10月24日 比較経済体制学会秋期大会 於立命館大学（琵琶湖・草津キャンパス）

- 10月24-25日 日本ロシア文学会定例総会 於筑波大学
11月6-8日 日本国際政治学会研究大会 於神戸
2009年11月7-8日 オホーツク海環境保全シンポジウム 於北大
11月12-15日 米国スラブ研究促進学会 (AAASS) 年次大会 於ボストン
12月12-13日 新学術領域研究第2回国際シンポジウム 於法政大学
12月19日 GCOE スタートアップ・シンポジウム 於スラブ研究センター
2010年3月4-5日 第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於ソウル
6月5-6日 比較経済体制学会全国大会 於大阪市立大学
7月8-9日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
7月26-31日 ICCEES (国際中欧・東欧研究協議会) 第8回世界会議 於ストックホルム
- センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。
[大須賀]

図書室だより

◆ 工藤幸雄氏旧蔵書の受入 ◆

昨年7月5日、ポーランド文学者で元多摩美術大学教授の工藤幸雄氏が逝去されましたが、同年の暮れ、蔵書の整理をされていた関係者より連絡があり、その蔵書の一部をスラブ研究センターに寄贈いただけることとなりましたので、お知らせします。

内訳としては、ポーランド文学関係のポーランド語書籍、雑誌、および連帯運動関係資料があり、戦後のポーランド文学についての蔵書を大幅に充実させることができると期待されます。なお、資料は既に、この1月に到着しましたが、直後の引越、およびその後の作業の関係で、受入・整理の開始にはいま暫く時間を要する状況です。今後、作業が進展しましたら、改めてご案内させていただきます。

また、今回の寄贈につき、ご理解をくださいましたご遺族、および、目録の作成や梱包など、尽力くださいました関係者のみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。[兎内]

◆ 帝政ロシア地図帳デジタル版の公開 ◆

本年5月より、ウェブサイト (<http://src-materials-hokudai.jp>) を立ち上げ、本センターの所蔵する、帝政ロシア末期に作成された2冊の地図帳の画像を公開しています。

そのひとつは、『マルクス版世界地図帳』(ペテルブルク, 1905年)、もうひとつは、土地整理・農業総局移民局が同じマルクス社から刊行した3巻本『アジア・ロシア』(ペテルブルク, 1914年)の付録地図帳です。前者は、世界地図ですので、ロシア帝国だけでなく、日露戦争直前の世界がロシアの地図にどのように表現されたかを見ることができます。なお、残念ながら、「バルカン」の図幅が欠けています。後者は、シベリア、極東、および中央アジアを把握するために作成された地図帳で、地形や行政区分の他、気候、土壌、民族、宗教、通信、農業、予算など、さまざまな角度から当該地域を図化しています。

いずれも、大判で、劣化もあり、資料にかかる負荷を考えるとコピーの提供が難しかったのですが、京都大学の田中耕司氏を代表とした科研費「アフロ・アジアの多元的情報資源の共有化を通じた新たな展開」(基盤研究A, H18-20)において、400dpi カラーキャナーでデ

デジタル画像を採取し、さらに、公開用のソフトウェアを開発することができました。次いで、昨年開始された新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の中で、サーバーの設定と運用に要する経費をまかない、今回の公開に漕ぎつけた次第です。

また、両地図帳の収録地図のうち、ロシア・極東部とその周辺について、対比できる図を設け、その中の主要地名について、日・露・英・中の4つの言語で検索し、表示し、センターの所蔵する関連写真を表示できるようにしました。また、ウラジオストクのロシア国立極東歴史文書館の所蔵フォンドについてのデータを、日ロ両語で検索できるようにしています。

このような、ウェブサイトを通じた情報発信について、今後の展開が決まっているわけではありませんが、担当者としては、機会を捉えて推進していきたいと考えています。[兎内]

ウェブサイト情報

2009年4～6月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
4月	355,656 (11,855)	12,448 (415)	2,041 (68)	101,432 (28%)	173,246 (49%)	80,978 (23%)
5月	335,700 (10,829)	12,506 (403)	2,166 (70)	101,632 (30%)	163,669 (49%)	70,399 (21%)
6月	347,781 (11,593)	14,994 (500)	2,394 (80)	118,772 (34%)	166,863 (48%)	62,146 (18%)

編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies No. 21 ◆ *Post-Communist Transformations: The Countries of Central and Eastern Europe and Russia in Comparative Perspective* の刊行

昨年12月にセンターで開催された国際ワークショップに提出された報告を基に編まれた論文集が、Slavic Eurasian Studies シリーズの第21巻として出版されました。英国のR. サクワ、米国のP. ラトランド、チェコのM. ポトゥーチェクという外国の論客と、上垣彰、仙石学、大串敦というわが国のベテランと若手がポスト共産主義時代のロシアと中東欧の体制転換を比較という視点から論じた力作が並んでいます。掲載論文は以下の通り。[林]

- Atsushi Ogushi From the CC CPSU to Russian Presidency: The Development of Semi-Presidentialism in Russia
- Richard Sakwa Subjects or Citizens: Obstacles to the Exercise of Constitutional Sovereignty Rights in Contemporary Russia
- Peter Rutland Post-Socialist States and the Evolution of a New Development Model: Russia and China Compared
- Akira Uegaki EU Integration and the "Backwardness" of New Member States: The Case of Romania and Bulgaria

Martin Potůček Welfare State Transformations in Central and Eastern Europe
Manabu Sengoku Welfare State Institutions and Welfare Politics in Central and Eastern Europe: The Political Background to Institutional Diversity

◆ スラヴ研究 ◆

『スラヴ研究』第57号(2010年春刊行予定)の原稿締切は、普段より1ヵ月遅れの9月末です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください(事前申し込みは不要です)。[宇山・長縄]

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第27号は校正作業中です。内容は以下の通り(掲載順未定)。[野町]

- Liudmila Missonova Оленеводство и идентичность уйльта Сахалина (советский и постсоветский периоды)
Mikhail Shkarovskiy Сталинская религиозная политика и Русская Православная Церковь в 1943-1953 годах
NONAKA Susumu Примечания к чужим письмам как способ медиальной диалогичности В. Розанова («Литературные изгнанники» и др.)
Andreas Renner Progress through Power? Medical Practitioners in Eighteenth-century Russia as an Imperial Elite
German Kim Education and Diasporic Language: The Case of Koreans in Kazakhstan
Gulmira Sultangaliyeva Казахское чиновничества Оренбургского ведомства: формирование и направление деятельности (XIX)
Anatolii Remnev «Тигр, заколотый гусиным пером». Казус западносибирского генерал-губернатора князя П.Д. Горчакова
Maksim Klymentiev Taking History by the Scruff: Peter the Great and Russia's Cultural and Historical Diversity in Alexander Pushkin's *The Captain's Daughter*
Predrag Piper Robert D. Greenberg, *Language and Identity in the Balkans: Serbo-Croatian and Its Disintegration*. Oxford University Press Inc., 2008, 205 pp. (Book Review)

◆ スラヴ研究センターレポート No. 3 ◆

5月8日におこなわれたスラヴ研究センターとブルッキングス研究所北東アジア政策研究センターの共催シンポの成果が、スラヴ研究センターレポート No. 3「日米同盟：北東アジアを越えて」として刊行されました。[岩下]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/report/20090702-j.pdf>

会議 (2009年4～7月)

◆ センター運営委員会 ◆

2009年第1回 7月10日

議題

1. 共同利用・共同公募に係わる審査について
2. スラヴ研究センターの研究活動及び運営について
- 3 その他

◆ センター協議員会 ◆

2009 年度第 1 回 6 月 23 日

- 議題
1. 特任教員（旧外国人研究員）候補者の選考について
 2. 2008 年度支出予算決算について
 3. 2009 年度支出予算配当（案）について
 4. 教員の兼業について
 5. その他

2009 年度第 2 回 7 月 8 日（持ち回り）

- 議題
1. 特任教員（旧外国人研究員）候補者の選考について

2009 年度第 3 回 7 月 21 日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 117 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[岩下／大須賀]

- 5 月 25 日 Anna Ponomareva（インペリアル・カレッジ:インペリアル・ビジネススクール、英国）、佐々木路子
- 6 月 4 日 Alexander Morrison（リヴァプール大、英国）
- 6 月 15 日 Bernd Heine（ケルン大、ドイツ）
- 6 月 19 日 Boris Lanin（ロシア教育アカデミー）
- 6 月 24 日 井上暁子（日本学術振興会特別研究員）
- 7 月 6 日 新井正紀（千葉大）
- 7 月 9-11 日 Choi, Suh Myun（韓国研究所）、Shebonti Ray Dadwal（防衛研究所、インド）、David Dusseault（ヘルシンキ大、フィンランド）、Mushtaq Kaw（カシ米尔大、インド）、Sarfranz Khan（ベシヤワル大、パキスタン）、Lee, Kyoung Hwa（韓国外務省）、Ghafoor Liwal（アフガニスタン地域研究所）、Pang, Jun（人民大、中国）、Vladimir Popov（新経済学校、ロシア）、Ambuj Sagar（インド工科大）、Florian Stammler（東北大）、Anna Stammler-Gossmann（東北大）、李智恩（タシケント国立研究所）、Harry Wu（香港理工大、中国）、秋田茂（大阪大）、新井正紀（千葉大・院）、粟屋利江（東京外国語大）、石井明（東京大学名誉教授）、伊藤融（防衛大）、井上貴子（大東文化大）、今井克（マンチェスター大）、岩田賢司（広島大）、上垣彰（西南学院大）、宇多文雄（上智大）、小笠原弘幸（青山学院大）、蟹江憲史（東京工業大）、亀山康子（国立環境研究所）、川島真（東京大）、木村崇（京都大）、雲和広（一橋大）、黒川清登（JICA 研究所）、小浜正子（日本大）、小森田秋夫（東京大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、齋藤修、佐々木史郎（国立民族学博物館）、佐藤隆広（神戸大）、篠原琢（東京外国語大）、杉本良男（国立民族学博物館）、鈴木義一（東京外国語大）、栖原学（日本大）、高尾千津子（立教大）、武田友加（早稲田大）、月村太郎（同志社大）、唐亮（早稲田大）、中村唯史（山形大）、中村靖（横浜国立大）、長與進（早稲田大）、西山克典（静岡県立大）、野林厚志（国立民族学博物館）、袴田茂樹（青山学院大）、服部倫卓（ロシア NIS 貿易会）、広瀬崇子（専修大）、古矢旬（東京大）、細井長（国学院大）、堀井伸浩（九州大）、堀江典生（富山大）、前田弘毅（大阪大）、

松澤祐介（西武文理大）、丸川知雄（東京大）、道上真有（日本国際問題研究所）、三輪博樹（筑波大）、村田雄二郎（東京大）、本村真澄（JOGMEC）、山根聡（大阪大）、湯浅剛（防衛研究所）、吉田修（広島大）、吉村貴之（東京外国語大）

7月16日 岩崎理恵（東京外国語大）

7月18日 宇佐見耕一（アジア経済研究所）、小川有美（立教大）、仙石学（西南学院大）、平田武（東北大）、村上勇介（京都大）

7月31日 George Sanikidze（東洋学研究所、グルジア）

◆ 研究員消息 ◆

宇山智彦研究員は5月4～12日の間、ブルッキングス研究所との共催シンポジウムへの参加等のため米国に出張。また、7月2～5日の間、科学研究費研究に関する会議での研究報告のため、中国に出張。

岩下明裕研究員は5月5～10日の間、ブルッキングス研究所との共催シンポジウムへの参加のため米国に出張。また、6月13～15日の間、ハルビン国際会議出席のため中国に出張。また、7月2～5日の間、科学研究費研究に関するウラジオストク会議出席のためロシアに出張。

林忠行研究員は5月6～10日の間、ブルッキングス研究所との共催シンポジウムへの参加のため米国に出張。

松里公孝研究員は5月28日～6月1日の間、新学術領域研究に関する日中比較研究についての打合せのためカナダに出張。また、6月17～21日の間、新学術領域研究に関する国際シンポジウムでの報告のため韓国に出張。

野町素己研究員は6月3～10日の間、科学研究費研究に関する海外資料調査及び研究計画打合せのためポーランドに出張。

◆ SRC メール・マガジンに登録すると・・・ ◆

月一度のペースでみなさまにセンターの活動を配信するメール・マガジンが創刊されて、半年がたちました。この間、読者の方々にはご好評いただいておりますが、新学術領域研究やGCOEなどの研究員公募、共同利用・共同研究拠点としての研究プロジェクトなどの募集、各種イベント・刊行物の案内など内容は日々、充実して参りました。またショート・ノティスでの公募やイベント情報については、号外としての配信により、リアルタイムに近いかたちでみなさまにご活用いただいております。最近のセンターの活動は、スラブ・ユーラシア地域研究を越えて展開しており、専門の異なる方々にとってもSRCメール・マガジンはお役にたてると思います。まだ登録されていない方は今すぐにご登録ください。すでに登録されている方はぜひ同僚や友人にご紹介ください。なお、下記のアドレスから簡単に登録できます。
[岩下]

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/mail_maga-j.html

夏期シンポジウム (2009.7.9-10) : セッションの表舞台以外から、さまざまな表情を拾ってきました

by Koshino & Goto



シンポジウム初日の受付の様子



レセプションの様子。スピーチしているのはロシアからの唯一の参加者ポポフ教授。比較地域大国のプロジェクトにふさわしく、中国やインド・南アジアからの参加者が多かったのも今回のシンポジウムの特徴でした。



議論の合間にちょっと一息。会場外の休憩スペースに新しく設けられた、会議の内容を映し出すモニターは好評でした。



セッションでの報告が無事に終わり、サッポロビール園での懇親会で盛り上がる人たち

エッセイ

宇山智彦 上海協力機構と新疆民族問題：上海での会議に参加して

p. 14

2009年8月7日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 田畑伸一郎
発行者 岩下明裕
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>